

平成28年4月18日 第51号

柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録
すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市大和町栄1078-3
発行人 武末十治男
編集責任者 金子俊彦



火

埋

「ある手紙」(紹介文)

「学校では雑草と薬草の区別を教えないのか」校長への電話があった。

「昨日生徒が崖の斜面の除草をしていた。きれいになったのは結構だが、薬草まで抜いてしまった。先生も一緒になって、呆れたもんだ。こんなこと解らなくて教育ができるんですか。気をつけてほしい」一方的に喋りまくって電話を切った。こういう電話や投書は少なくないが、褒める類のものは皆無にちかい。彼(校長)は、先生達に情熱を失わせることを恐れて、ほとんど胸に秘めておいた。小学校の違足のとき、ある児童が一本の草の名を先生にたずねた。彼は理科も教えてはいるが植物はよく知らない。返答に困ったが、ふと思いついて、「君のお父さんは植物学者と聞いている。先生よりお父さんに教えてもらいなさい。」言われたとおり、その子は父にたずねた。予想もしない言葉が返ってきた。「先生の知らないことを、私が知っているはずがない。明日もう一度たずねてみなさい。今日は遠足で忙しかったんだよ」翌朝、父は先生宛の手紙を子供に持たせた。不安な気持ちで開封すると、その草の詳細な説明が記されてあった。そして末尾に「私から教えることはたやすいけれども、先生から教えてやってください。先生への信頼感を傷つけたくないのです。どうかよろしく願います」と。

※自分の意見として(武末十治男)

このように自分の知ったかぶりはずせに、相手に恥をかかせず、その気持ちまで察しての思いやりの心は、大いに持ちつづけ、他の人もも接したいものですね。それが自分の為かも？